鶏肉

◆飼養動向

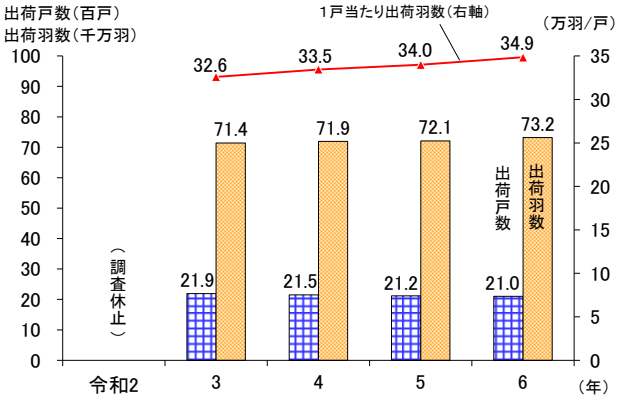
６年２月現在の出荷羽数は前年比１．５％増

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の減少や大規模層（年間出荷羽数５０万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方、１戸当たりの平均飼養羽数や平均出荷羽数は年々増加傾向にある。

令和６年のブロイラーの出荷戸数は２１００戸（前年比０．９％減）と前年をわずかに下回った（図１）。また、出荷羽数は７億３１９２万９０００羽（同１．５％増）と前年をわずかに上回った。この結果、１戸当たりの出荷羽数は３４万８５００羽（同２．５％増）と前年をわずかに上回った。

なお、ブロイラーの出荷戸数および出荷羽数を規模別に見ると、ブロイラーの出荷羽数が５０万羽以上の層は、出荷羽数全体の５３％、出荷戸数全体の１５％をそれぞれ占めており、いずれも増加傾向となっている。

図１　ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



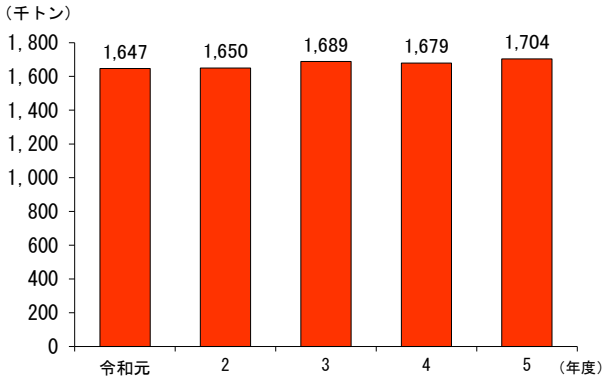
資料：農林水産省「畜産統計」
注１：各年２月１日現在。
注２：令和２年は農林業センサス実施年のため、データなし。

◆生　産

５年度の生産量、前年度比１．５％増

鶏肉の生産量は、消費者の健康志向や根強い国産志向による堅調な需要を背景に増加傾向で推移しており、令和５年度は１７０万３５９１トン（前年度比１．５％増）と前年度をわずかに上回った（図２）。

図２　鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

◆輸　入

５年度の輸入量、鶏肉は前年度比７．７％増、鶏肉調製品は同４．７％減

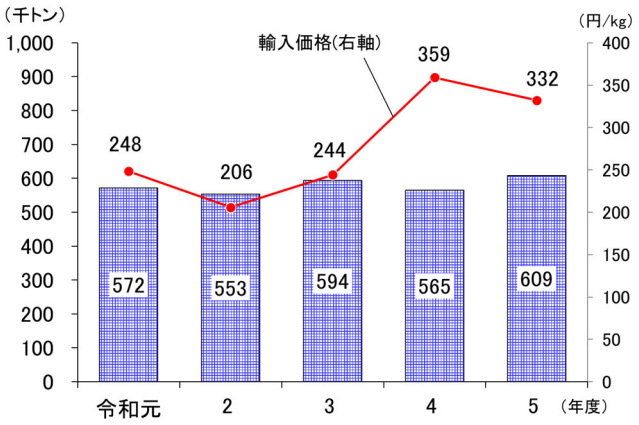
鶏肉

鶏肉の輸入量（冷凍品）は、国内の鶏肉消費量の約２５％を占めており、近年は５０万トンを超えて推移している。

令和４年度は、前年度のブラジルからの輸入量が多かったことおよび米国での高病原性鳥インフルエンザ（ＨＰＡＩ）発生の影響で前年度を下回った。一方、５年度はブラジルでのＨＰＡＩ発生による影響は見られたが、リスクを見込んだ前倒しでの輸入やタイからの代替輸入により、６０万８５６９トン（前年度比７．７％増）と前年度をかなりの程度上回り、輸入量は過去最高を記録した（図３）。

輸入価格（ＣＩＦ）は、１キログラム当たり３３２円（同７．５％減）と前年度をかなりの程度下回った。

図３　鶏肉の輸入量および輸入価格（ＣＩＦ）の推移



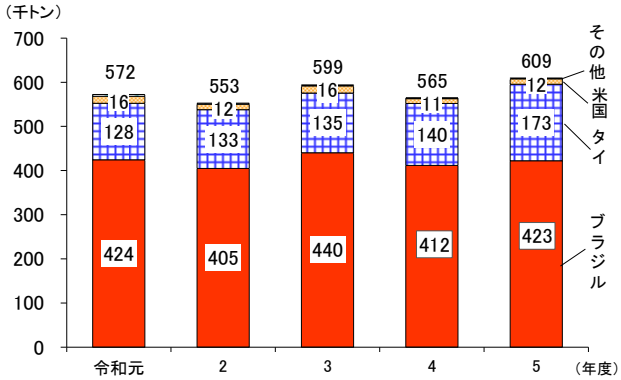
資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

輸入先別には、全体の７割を占めたブラジル産については、４２万２５１７トン（同２．６％増）と前年度をわずかに上回った（図４）。

タイ産については、平成２５年度の輸入再開以降、細かい規格への対応が可能であることなどから一定数量のニーズを得て推移しており、１７万３０２６トン（同２３．２％増）と前年度を大幅に上回り、４年連続の増加となった。

米国産については、クリスマス需要などに向けられる骨付きもも肉が多くを占めており、１万２３２１トン（同１２．１％増）と前年度をかなり大きく上回った。

図４　鶏肉の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注１：実量ベース。
注２：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

鶏肉調製品

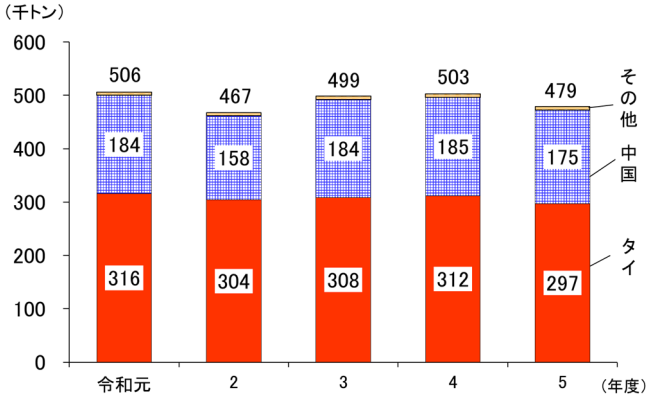
鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、外食・中食需要の高まりや消費者の簡便志向などを背景に増加傾向で推移している。

主な輸入先は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっており、両国からの輸入量の合計で全体の９９％を占める。

令和３年度以降、中食需要などにより輸入量は堅調に推移していたものの、５年度は円安などの影響により４７万９３９４トン（前年度比４．７％減）と前年度をやや下回った（図５）。

輸入先別には、タイ産は、平成３０年度以降、３０万トンを超える輸入が続いていたものの、５年度は２９万７２２５トン（同４．６％減）と前年度をやや下回り、全輸入量に占める割合は６２％となった。一方、中国産は、１７万５１１９トン（同５．３％減）と前年度をやや下回り、同割合は３７％となった。

図５　鶏肉調製品の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

◆消　費

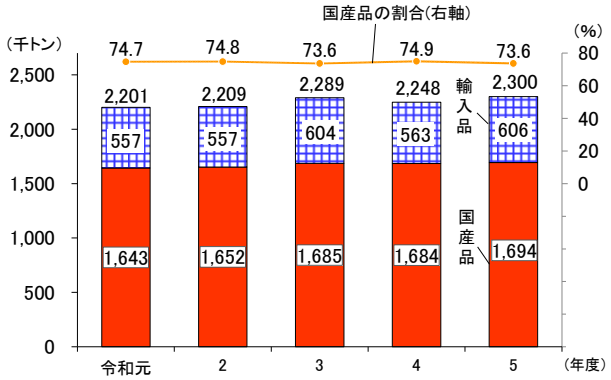
５年度の推定出回り量は前年度比２．３％増、家計消費量は同２．４％増

鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の低価格志向や健康志向の高まりなどにより、特にむね肉を使った商品開発が進んだことなどから、おおむね増加傾向で推移している。

令和５年度は、引き続き中食需要が堅調であることなどから２３０万８４トン（前年度比２．３％増）と前年度をわずかに回った（図６）。

出回り量の内訳を見ると、鶏肉消費量全体の約４分の３を占める国産品は、堅調な需要が継続したことで、１６９万３７７２トン（同０．６％増）と前年度をわずかに上回った。また、主に加工・業務用に利用されている輸入品も同様に６０万６３１２トン（同７．６％増）と前年度をかなりの程度上回った。なお、合計に占める国産品の割合は７３．６％と、前年度から１．３ポイント減少した。

図６　鶏肉の推定出回り量の推移



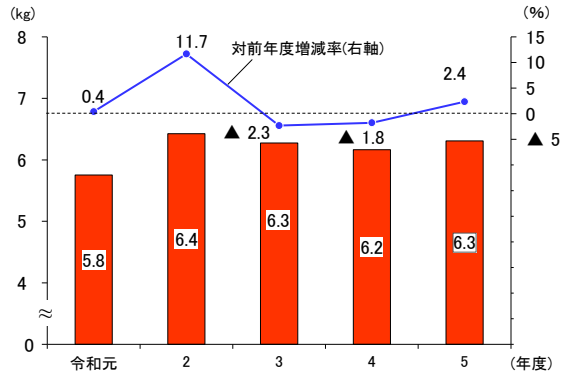
資料：農畜産業振興機構推計
注１：実量ベース。
注２：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

家計消費

鶏肉消費量の約４割を占める家計消費量は、消費者の健康志向の高まりに加え、食肉の中での価格優位性を背景に、長期的には増加傾向で推移している。

令和２年２月下旬以降、ＣＯＶＩＤ－１９の影響による巣ごもり需要が増加する中、食肉の中でも比較的安価な鶏肉の購入数量が増加し、２年度に過去最高を更新した。３年度以降、巣ごもり需要に一定の落ち着きは見られたものの、外食需要の回復に伴い、引き続き高い水準となっており、５年度は年間１人当たり６．３キログラム（前年度比２．４％増）と前年度をわずかに上回った（図７）。

図７　鶏肉の家計消費量（年間１人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

◆在庫

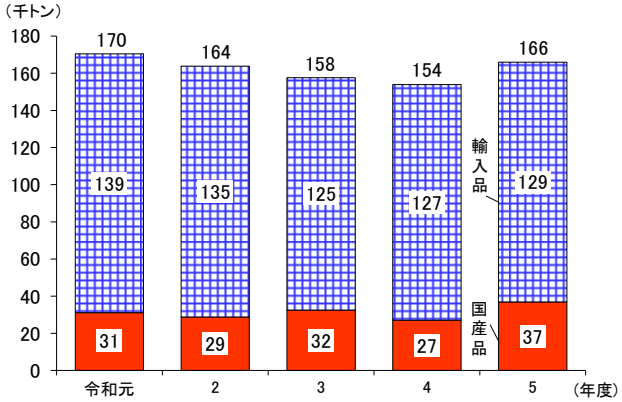
５年度の推定期末在庫量、前年度比７．８％増

鶏肉の推定期末在庫量は、その約８割を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和５年度は、国産鶏肉生産量が増加したことやＨＰＡＩ発生に備えた買い付けなどで輸入量が増加したことなどから、１６万５９７８トン（前年度比７．８％増）となり、４年ぶりに前年度を上回った（図８）。

このうち、輸入品は１２万９１１０トン（同１．８％増）と前年度をわずかに、国産品は３万６８６８トン（同３６．３％増）と大幅にいずれも前年度を上回った。

図８　鶏肉の推定期末在庫量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

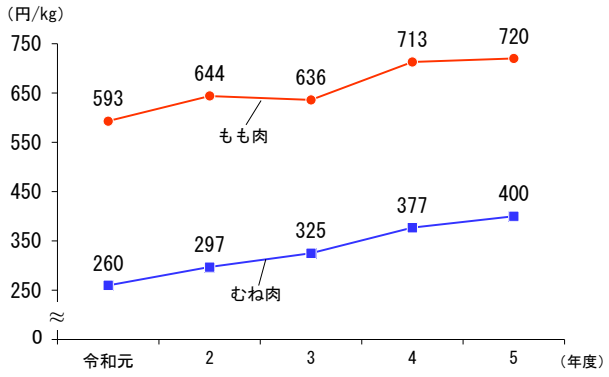
◆卸売価格

５年度の卸売価格、もも肉は前年度比１．０％高、むね肉は同６．１％高

国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）は、日本では「もも肉」に対する消費者の嗜好（しこう）が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて高くなっている。「もも肉」は、主にテーブルミートに仕向けられており、「むね肉」は総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用の利用が多くなっている。

「もも肉」は、令和５年度も夏場の低需要期に向けて低下し、年末の高需要期に向けて上昇する例年の季節性の変動はあったが、安定的な需要が継続していることなどから、卸売価格は１キログラム当たり７２０円（前年度比１．０％高）と前年度をわずかに上回った（図９）。「むね肉」も、２年度以降、堅調な需要が継続しており、５年度は同４００円（同６．１％高）と前年度をかなりの程度上回った。

図９　国産鶏肉の卸売価格（東京）の推移



資料：農林水産省「食鳥市況情報」
注：消費税を含まない。

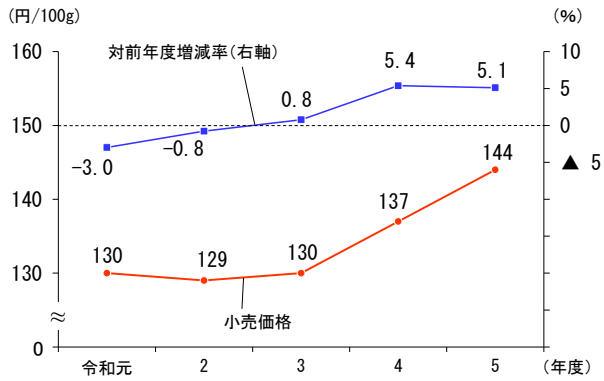
◆小売価格

５年度の小売価格（もも肉）、前年度比５．１％高

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、近年、１００グラム当たり１３０円を超えて推移している。

同価格は、令和３年度に４年ぶりに前年度を上回って以降、上昇傾向で推移しており、５年度も卸売価格の上昇などにより同１４４円（前年度比５．１％高）と前年度をやや上回り、過去最高値となった（図１０）。

図１０　鶏肉の小売価格（もも肉・東京）の推移



資料：総務省「小売物価統計調査報告」
注：消費税を含む。